

光陰似箭

暴力に焦点を当てて社会のゆがみを描く ——ジャ・ジャンクー監督の新作『罪の手ざわり』——

(早稲田大学) 宇野 和夫

本年5月31日から東京・渋谷など日本各地で、ジャ・ジャンクー（賈樟柯）監督の日中合作映画『罪の手ざわり』（原題：天注定）が上映される。同監督は、1998年に『一瞬の夢』でベルリン国際映画祭最優秀新人監督賞、2000年に『プラットフォーム』でベネチア国際映画祭最優秀アジア映画賞を受賞し、2006年にはついに『長江哀歌』でベネチア国際映画祭金獅子賞（グランプリ）を獲得した中国映画界の若き巨匠（1970年生まれ）である。

新作の『罪の手ざわり』は2013年にカンヌ国際映画祭最優秀脚本賞に輝き、放映権を購入した国は41か国以上に上った。欧米諸国ではすでに公開され、英BBC局や米ニューヨーク・タイムズ紙から「2013年の10大映画」の1本に選ばれている。このように海外での評価はすこぶる高いが、肝心の中国大陸での公開は当初2013年11月に予定されていたものの現在では不透明となっており、上映禁止の判断が下る恐れもある。

では、『罪の手ざわり』はどういう作品なのだろうか。ジャ監督はこれまでの映画では悲劇的な状況を受け入れて耐える人々を撮ってきたが、今回の作品では作風をがらりと変え、中国が直面する暴力に焦点を当てる形で理不尽な社会構造のゆがみを活写した。今の中国社会は、強者の暴力によって虐げられ人格危機に陥った社会的弱者が失われた尊厳を取り戻すために最も直接的で即効的な方法である暴力に訴えざるをえない状況にあることを真正面から描いたのである。タブーに挑戦したこの作品が、社会の安定維持を「最も重要な政治任務」と位置づけ全力を挙げて取り組んでいる当局にとって、好ましくない映画の1つとなっていることは容易に推察される。

4つの実話に基づく脚本

この映画にはクエンティン・タランティーノ監督や北野武監督並みの血なまぐさい銃撃シーンや暴力シーンがアクセントとして盛り込まれており、相当衝撃的である。それは同作品が近年の中国で実際に起こった3つの突発的暴力事件と1つの自殺事件をモデルとしているからである。モデルとなったのは次の4事件である。

(1) 2001年10月、山西省晋中市榆次区において炭鉱経営者の胡文海は報復のために猟銃を発砲して14名を殺害し、3人を負傷させた。

(2) 2004年から2008年までの約8年間に南京、長沙、重慶などで農民工の周克華が猟銃や拳銃を使って巨額の現金を強奪し、10人を射殺した。

(3) 2009年5月、湖北省巴東県のホテル従業員鄧玉嬌は強引に関係を迫る地元政府の役人3人を果物ナイフで切り付け、うち1人が死亡した。

(4) 2010年1月から11月にかけて、台湾の富士康集団（フォックスコン）の中国工場（深圳など）に勤める若い従業員が連続して宿舍から飛び降り自殺を図った（計14件）。

ジャ監督は実際に起きた上記の4つの事件を基にして1つの人間ドラマを作り上げた。映画『罪の手ざわり』には次のような4人の主要人物が登場する。①村の集団所有だった炭鉱の利益が1人の実業家に独占されたことに激怒している山西省の男、②妻子を村に残して出稼ぎに出た後、出稼ぎでは到底稼げない大金（実は強盗・殺人を繰り返して稼いだもの）を各地から送金する重慶の男、③娼婦と勘違いして性的サービスをしつこく迫る客の求めを断ったことで殴られ、身を守るためにナイフで客を切りつけてしまう湖北省の女（勤務先のサウナの受付係）、④単純な工場労働に飽き、広東省の歓楽街に身を投じるなど仕事面で恵まれず、また息子がどんな状況にあるか気にもかけない母親から電話で「どうして金を送ってこないのか」となじられたことも重なって、絶望のあまり

ベランダから飛び降りる湖南省出身の男である。彼らは元々ごく普通の人間であったが、急激に変化する時代の波に乗り遅れて「負け組」となり、次第に追いつめられ暴力に訴えるようになっていく。

筆者はこのうち、貧富格差を背景とした人物①の話が最も印象に残った。話はこうである。山西省の炭鉱夫である“大海”は集団所有だった村の炭鉱が富豪の炭鉱経営者に独占されたことに大いに憤りを感じていた。また村長がその口止めに賄賂をもらっているのではないかと疑っていた。彼は「信訪」、すなわち手紙を書いて苦情を申し立てようとしたが、送付先がわからずそれを果たせないでいた。そこでかつて同級生だった炭鉱経営者を見つけ、「お前を訴えてやる」と因縁をつけたところ、その手下によってこっぴどく殴打され、大けがを負ってしまった。ある日、街の広場の舞台上で演じられていた京劇「逼上梁山」（水滸伝）の主演、林冲の「その人は憤怒により剣を抜いた」という言葉に啓示を受け、恨みを晴らす方法を探し当てた。その後、自宅に戻った“大海”は猟銃を持ち出し、6人を殺害するに至る。

“大海”が京劇「逼上梁山」の主演俳優（林冲役）の台詞の一節を偶然耳にし、それに自分の思いを重ねるという演出は秀逸である。「逼上梁山」とは、もともと「逼られて梁山泊に上る」（追いつめられ窮余の策として梁山泊に逃げ込む）という意味であるが、現代では転じて「追いつめられてやむなく反抗する」という意味で広く使われている。観客は映画の中の京劇のタイトルからもこの話に込められた監督の意図が読みとれる仕掛けになっている。

『水滸伝』といえば、思い出されるのは「替天行道」（天に替わり道を果たす、天に替わって道義の責任を果たす）という旗印である。孤立無援の“大海”は銃殺という極端な暴力行為に出たが、それを促したのは彼の理解する「天道」（道義）

を彼なりに果たすという観念であったとジャ監督はあるインタビューで語っている。

TVドラマ『水滸伝』の放映禁止提案

近年、貧富格差が拡大の一途を辿り、社会矛盾が激化する中国では突発的な暴力犯罪事件が後を絶たない。たとえば、6人が死亡し、4人が負傷した上海宝山区銃撃事件（2013年6月22日）や34人（警察の5人を含む）が死亡し、143人が負傷した雲南省昆明駅無差別襲撃事件（2014年3月1日）などである。

暴力のレベルが明らかに上昇した治安状況を受けて、3月開催の全国政治協商会議の席上、委員の李海浜は次のような提案を行い、波紋を呼んだ。

「『水滸伝』のようなテレビドラマは放映禁止にすべきであり、戦争を題材とするテレビドラマもいくらか規制すべきである。これらはいずれも暴力と関係がある。『水滸伝』は旧時代の名著であるが、我々の時代にはふさわしくない。」（3月5日付『中国経営報』）

周知のように、明代の口語体の長編小説『水滸伝』は汚職官吏や不正がはびこる北宋の時代、宋江を首領とする108人の豪傑が山東省の“梁山泊”と呼ばれる自然の要塞に集結し、そこを根城にして官軍に抵抗し、やがて滅びていくという物語である。よく言えばアウトロー、悪く言えば盗賊の集団が「替天行道」の旗を立ててお上に楯突くというストーリーであるだけに、明・清の朝廷からしばしば発禁処分とされた歴史がある。

幸い、李海浜委員の提案は支持者を集められず、単なる提案にとどまったが、今回の件は為政者が青少年に対する『水滸伝』の影響に過敏になっていることを示すものとなった。将来もし『水滸伝』が本格的に放映禁止や禁書扱いになれば、それは中国社会が深刻な危機に陥っていることを示すシグナルとなろう。